

総合教育会議記録

1. 日時

令和7年1月22日（水曜日）

午後3時29分開会、午後5時29分閉会

2. 場所

条里南庁舎会議室

3. 出席者

横手市長 高橋 ^{だい}大

横手市教育委員会

教育長 伊藤 孝俊

教育委員 二階堂 ^{まもる}衛

教育委員 泉川 国子

教育委員 中村 千寿子

教育委員 加賀谷 長吉

4. 説明のため出席したもの

総務企画部総務課長 田中 弓子

教育総務部長 佐藤 耕樹

教育指導部長 岡固 敦

教育総務部次長兼教育総務課長 近江 秀和

文化財保護課長 信太 正樹

文化財保護課主幹 石田 正明

図書館課長 高橋 秀明

生涯学習課長 木村 智子

生涯学習課主幹兼図書館課主幹兼生涯学習館館長 木村 雅美

スポーツ振興課長 進藤 ^{ともりの} 倫啓

学校教育課長 佐藤 ^{たかのり} 隆徳

学校給食課長 遠藤 ^{よしひと} 督士

教育指導課長 赤川 美和子

教育指導課副主幹兼教育指導係長 高橋 夏子

教育指導課部活動地域移行コーディネーター 菅 雅彦

5. 事務局

総務課課長代理兼文書法規係長 後藤 光晴

教育総務課課長代理兼教育総務係長 ^{おだしま} 小田嶋 あけみ

教育総務課教育総務係副主査 多賀谷 ^{あやこ} 紋子

6. 会議に付した事件

(1) 令和7年度教育行政方針(案)について

(2) 部活動の地域移行について

(3) その他

7. 会議の経過と結果

開会 午後3時29分

●田中総務課長

ただ今より令和6年度横手市総合教育会議を開催する。

この総合教育会議は、平成27年の地方教育行政法の改正に伴い設置が規定されたもので、市長と教育委員により構成されている。

本日の終了時刻は5時頃を予定している。皆様のご協力をお願いする。

開会にあたり、市長からご挨拶を頂戴する。

●高橋市長

総合教育会議に御多用のところ参集いただき感謝申し上げます。平素、教育委員会委員各位においては市の市民に対する教育全般にわたって、様々な知見からいろいろとご指導ご協力、また運営に対してもご尽力いただいていること、この場を借り深く感謝申し上げます。また、それ以外にも市の諸々の取り組みに対して様々なご提言ご配慮をいただいていることを深く感謝申し上げます。さて、トランプ氏がアメリカで大統領に就任するということで、180度世界を変えていくくら

いの勢いで、地球全体を翻弄するような、激震ともいえるような前触れが聞こえてくる。同盟を結んでいる日本国としても、おそらくいろいろと翻弄されるだろうと思うが、揺るがない国としての指針があれば慌てふためくことなく、毅然とした日本であり続け、動いていくかと思う。ただ、背骨がしっかりしていなければ、翻弄されると思う。毅然と振る舞える日本であってほしい。国の政治を担う方々にはそういう姿勢を期待するところである。さて、横手市については、人口減少、更なる少子化、人口社会減で、尻窄みの様相を覆すことが出来ず、それに抗うための施策を打ってはいるものの、なかなかそれが成果として響いて来ずということで、忸怩たる思いである。何とかこの厳しい状況を打破すべく市長当局、そして教育委員会、タッグを組んで今後も臨んでいかねばならないと強く思うところである。この少子化については、政策という外的な要因で何とか少子化を打破すべく、その流れを作っていくしかないわけであるが、特効薬も無く、全国的な好事例も参考に、悩みもがき、いろいろと現状打破に向けて取り組んでいかねばならないと思う今日この頃である。物事の継承について、大事なものを受け継ぐ立場の人でもそれを継承したくなる素晴らしいものを残して、それを受け継ぎ、語り継ぎ、そのようなことを意識したみんなでないと、やはり滅んでしまうのではないかと思った今日この頃である。昔からご先祖様を敬い、仏様に手を合わせることは当

然だっただろうが、今はなかなかご先祖を意識する機会も無く、また核家族ということで、祭壇にご先祖が祀られている風景のもとに暮らしている親達も少ない。やはり、家を守らなければとか、継承しなければという意識は昔はあった。大名家や武家の話でもお家断絶などはまかりならんということで努力したであろうし、要はご先祖を敬う人が途絶えてしまうことは面目ない、ご先祖に申し訳ないという意味でも、次の弔い敬う人たちが継承し続けることは善であり、そうあるべきだということで、母になる人も父になる人も子どもは必要ということが当たり前で、次を受け継ぐ人が存在しないという自由がそもそも発想の中に無かったのかもしれない。ただ、やはり個人の自由ということで、一代限り、その人の人生で完結させるという発想であれば、家を守る発想にもならないだろうし、この家を受け継ごう、引き継いでもらうという発想にもならない。これはもしかすれば欧米の自由主義、個人主義という部分がしっかり日本の教育に浸透したのかと思って、どの先進国も実は少子化から免れることができず、人口が増えている北欧があると言っても、あれは移民で増えているので、元々土着の白人の少子化は変わらない。お茶でも華道でも絵画でも、こういう素晴らしい技を継承したいとか、おうちを継承したいとか、企業のビジネスを継承したいとか、その継承してもらった本体が素晴らしくて、このまま一代限りで終わってしまうことは本当に悲しいことだと認識

すれば、次の担い手を発生させようという作用がその技、生業に関与している方々の意識としては強く残り、やはり子どもはどういう立場であっても、生み育てていかないといけないということは、自由抜きにして、大前提の人類の有り様と思うバイアスになっていくのではないかと強く思うようになった。やはり刹那的な自由経済主義、また株主民主主義だと、瞬間最大で利益を四半期とか、一会計年度でどれだけ上げるか、上げた利益をどれだけ株主に還元するか、なので海外の企業は短命である。短命だが瞬間的に最大の利益を上げて、駄目になったらどこかに売ってしまう。創業者ですらあっさり売る。でも日本の場合には100年企業、200年企業、400年企業、千年企業もある。やはりビジネスそのものも社会なんだという概念で、長く長く継承し、生業を守っていこうという意識があったが、やはり刹那主義、今だけ金だけ自分だけというような、そういう欧米の自由主義がすっかり日本にも浸透してきて、長い人生、一生以上に、その技とか大切なものを受け継ごう、更に未来永劫引き継いでいこうという意識は誰が教えるのだろうかと思う。もしかしたら誰も教えてないままということが今の現象なのかと思ったりもする。ついては、今のこの少子化という状況が何に起因するか、私もよくわからないが、そんなふうにも思ったりもしている。正解かどうかはわからない。ただ実際やれるべき正しい道というものが一本ではないにせよ、いろいろとチャレンジ

をし、しっかりこの横手というものを未来永劫継承したい、受け継ぐ側もこんな素晴らしいものだったら受け継ぎたいと思わせるようにしたい。倒産しそうな会社を引き継ぎたいという息子はいないわけだが、空前の売り上げ、空前の黒字という会社は受け継ぎたいという息子がいるのと同じで、倒産しかかっている会社の横手市を引き継ぎたいと思う次の世代はいないわけで、安泰で大丈夫、間違いないと思わせるような横手市に変えていかないといけないと思う今日この頃である。いろいろと問題はある。そして問題を解決するのは、しっかり横手の教育を受けた横手市民、そして子どもたちである。子どもたちはこの場所でしっかりこの横手を素晴らしいと認識して、何とか引き継ぎ、さらに発展させて、次の世代にバトンタッチさせてやろうという気概を持つ、そういう子どもたちになるべく多いことが、横手の将来の明るさに繋がっていくのだらうと思うところである。長くなっただが、いろいろ皆様方からも、「市長の考えは違うよ」「考え間違っているよ」というご意見でも構わないので、いろいろと教えていただきながら、横手のいい道しるべというものを模索してまいりたいと思うので、どうか引き続きのご指導、何卒よろしくお願い申し上げて挨拶に代えさせていただきたい。今日はよろしくお願い申し上げます。

●田中総務課長

ありがとうございました。続きまして、教育長からご挨拶を頂戴す

る。教育長よろしく願います。

●伊藤教育長

定例の教育委員会に引き続きの会議、よろしく願います。総務企画部総務課と教育総務課が連携をして、今年も総合教育会議を開催することができた。事務局の皆さんには心から感謝を申し上げます。ただ今、市長から、たくさんの課題があり、その課題解決のために果敢に挑戦して行こうという話であったと理解したところである。当然、教育委員会にもたくさんの課題がある。何とか一つ一つ、根気強く挑戦して、解決してまいりたいと思っている。例年、総合教育会議においては、教育行政方針の検討を中心に進めてきた。今回も市長に提案して、意見を伺うことはもちろんだが、全国的な教育委員会での課題になっている部活動の地域移行について、令和6年度は前明峰中学校校長の菅先生をコーディネーターとしてお願いをして、この1年間、その準備にあたってきたらもらっている。本格的に令和7年度から推進会議を発足するために、準備会を開催したところである。この1年間、その準備もずいぶん進んだという実感をしている。令和7年度は競技ごと、その競技の特性に合わせて、更に進めてまいりたいと考えているので、今日は市長にもその準備の状況について説明させてもらい、ご指導いただければと思って計画したところである。教育委員の皆さんにもご理解をいただきながら、教育委員会事務局の皆さんにも情報

共有をしていただいて、令和 7 年度の新たな試みに前向きに進んでいけるように、総合教育会議が意味あるものになるようによろしくお願いします。いをして、挨拶に代えたいと思う。何卒よろしくお願いします。

●田中総務課長

ありがとうございました。議題の進行については、教育総務部長にお願いします。

（１）令和 7 年度教育行政方針（案）について

●佐藤教育総務部長

令和 7 年度教育行政方針（案）についてを議題とする。説明をお願いします。

●近江教育総務部次長兼教育総務課長

本市教育の振興に係る各事業の展開については、毎年、教育行政方針において主な事業を取りまとめ、横手市議会 3 月定例会において報告している。お手元の資料の横手市議会令和 7 年度教育行政方針の案をご覧ください。

【以下、〔議題（１）資料〕を基に説明】

●佐藤教育総務部長

教育行政方針案の説明が終わった。皆様からご意見や質問、感想等でもいいので、何かあったらお願いしたい。この部分を少し詳しく聞きたいとか、これはどのような事業なのかというところがあったら、

遠慮なくご質問いただきたい。

●泉川教育委員

2 ページで、言葉がわからなくて、チーム担任制とはどういうものか。

●佐藤教育総務部長

教育指導課から願います。

●赤川教育指導課長

十文字中学校のチーム担任制について説明する。一般的に学級担任制では、担任を固定して1年間同じ担任が受け持つことがこれまでであった。例えば、4クラスある学年に学年主任も加えると5名の教員が1つの学年を担当しているとする。1週間ごとに担任が変わっていく。学級数よりも1名教員が多いので、1名の教員は全体を見通すことができる。これは教員の働き方改革のために行っているのではなく、1人の生徒をより多くの教員が目をかけることで、協同して子どもたちの成長を見守っていこうということである。今年度は十文字中学校で試行したが、保護者や生徒、教員の声を聞くと、良い点としては気軽にどの先生にも相談できる環境になったということ、保護者にしても、相談しやすい先生を選ぶことができるということ、教員側からすると自分のクラスに固定して見ていたものが学年全体を見ることができるようになったこと、生徒からの良い点としては、これまで学級

担任に頼ってきた部分が、より自分たちの学校だということで、生徒主体の活動が活性化してきたことが挙げられる。また、課題としては、まだまだ保護者の方に効果が周知徹底できていない。どの先生に相談していいか迷うといった課題点も出されているので、その課題も踏まえながら、来年度のことを検討している。

●佐藤教育総務部長

他にあるか。

【以下、[教育行政方針案] 中、令和 7 年度に新規で行う事業を再度説明】

●中村教育委員

6 ページの安全で安心して学べる教育環境の整備について、大きな改修工事は載っているが、子どもたちから聞いた話で、理科室で使っている椅子をテープを貼ったりして壊れかけているものを少しずつ直して使っているようだ。それに座ると時々お尻にくぎが刺さると。それは危ないので、別のものを持ってくるでもそれもまた良くない。それを先生に伝えて、先生もなるべく大丈夫なものを使わせているという状況を聞いた。大きいものも大事だが、普段子どもたちが使うものの安全も大事と感じるので、古いものの点検などにも気を配っていただきたい。

●近江教育総務部次長兼教育総務課長

ご指摘ありがたい。ここに書かれていない部分でも、かなりの数の工事などもしているし、備品の更新などもしているところだが、なかなか手の回らないところもあるので、そういったところも丁寧に状況を伺いながら、優先順位はあるが、生徒の環境を整えるように頑張っていきたい。

●佐藤教育総務部長

そのような危ないところがあれば、こちらに声を届けてもらいたい。他にあるか。

●二階堂教育委員

学校給食費第3子以降無償について、それをああしろこうしろなどという考えではないが、少子化対策に繋がるという文面であれば、その通りなのだろうという思いもある。先ほど、教育長と面談した時に、市の周辺部が廃れていけば、やがて中央も廃れていくだろうという話になった。私も全く同感で、今の出生数が周辺部の学校区で少なくなっている。それはそこに居住する者が少なくなっているということでもある。一つのアイデアとして、これを実現しなければいけないということではなく述べるのだが、頭を柔らかくして、横手市内でも教育特区なるものを考えていけば、例えば今の現状で言えば増田だとか、その他西の方も児童数が少なくなっているなので、そこに関しては第3子以降でなく第1子から無償化にするとか、実際にやるとかやらな

いとかではなく、そういうことも考えていく必要があるのではないかという思いが1点ある。また、周辺部が廃れていくことの歯止めを利かせるということであれば、教育行政を超えて、市の行政としても、その地区を税制上の特区にするとか、この地区に居住するのであれば税制上優遇されるとか、そういうことも考えていかないと、周辺部が廃れていく歯止めにつなげていけないのではないかという考えもある。10年20年、長いスパンで考えていかなければいけない問題が今現在山積みされている横手市であろうと思うので、今日は市長もいるので、大蛇を振るような大胆な発想を、実現するかしないかは置いて、検討していく姿勢がこれからは必要ではないかと常々思っている。教育行政を越えた部分での協力体制というか、大蛇を振るような大胆な発想で教育行政上も含めて考えていかなければいけない時代なのかと個人的には思っている。感想、ちょっとした意見である。

●伊藤教育長

先ほど教育委員の皆さんと話したことである。市の周辺部に位置する地域はなかなか人が入り込む機会がなくて、交流しづらい環境だと地政学的にも言える。現代的な課題としては少子化が進んでいる地域でもあり、横手市は幸いにして合併以降すぐ学校の統合計画を立て、一定の統合が終了している県内でも数少ない地域である。今、いろんなニュースが飛び込んでくるが、少子化に伴って出てくる話題は統合

の話がほぼ中心になっている。翻って横手市の場合は、一定程度の統合は進んでいるので、次の一手ということを考えていかないと今の出生数の少ない地域がますます学校の存続が危ぶまれるという事態が目に見えている。今、二階堂委員から更に進んで、その地域の特区として給食無償化はどうかという話があった。いずれ、このまま各学校を平等に見ているだけでは、少子化を乗り切れない。これだけははっきり言えるわけで、少し知恵を絞って、何とか令和7年度の秋口くらいには市長に提案できるレベルのものを考えたいと思っているところである。市長の考えももちろんあるかと思うので、いずれそのようなスケジュール感で皆さんのお知恵を拝借したいというようなことも考えている。これはまだ教育方針に示すような段階ではないので書いていないが、そういった具体的な工夫をしていくことを考えていただければと思う。二階堂委員の案も決して荒唐無稽な話ではないのではないのかと思った。いろんなアイデアがあると思うので、よろしくお願ひしたいということで話させてもらった。

●佐藤教育総務部長

この教育行政方針について市長から願ひする。

●高橋市長

いろいろな取り組みについての成果指標として、おもしろかったとか、これで好きになったとか、学校の中で熱中できるもの、それは授

業ではなくていいと私は思っている。熱中する、のめり込む、など、楽しい、面白いというものが学校という空間にあればいいと思う。それは授業ではなくてもいいと思う。何にはまるのかは、人それぞれの個性だと思う。学校内の普段のカリキュラムの中でその子がはまるもの、今提供できているものではないとしても何か少しでも学校の中で熱心に取り組める時間とか、給食と体育のために学校に行っているとか、そういう理由で学校に足を運ぶことでもいい。それは学校以外のいろいろな取り組みでも、良かったとか面白かったとか、またやりたいとか、何か楽しくなるような、好きになるようなことも目標にしたほうがいいような気がする。目標を羅列しているが、数値目標の達成よりも、取り組みに関わった人が何かを得て、大満足して、楽しかったと、この取り組みで人生の考え方が変わったとなれば、1人でも成功かもしれない。どうしても今はK P I 至上主義で数値目標があり、それを否定するわけではないが、それだけではない感覚的な成果、K P I 至上主義を超えた別次元の独自目標があってもいいのではないかと思った。

●佐藤教育総務部長

教育行政方針については内部で検討する政策会議があるので、文言等はもう少し変わるが、修正したものを2月の定例教育委員会で決定いただきたい。

（２）部活動の地域移行について

●佐藤教育総務部長

次に２番の部活動の地域移行に移る。

●菅コーディネーター

【〔議題（２）資料〕を基に説明】

●佐藤教育総務部長

部活動の地域移行について、ご質問、ご意見等があったらお願いします。

●加賀谷教育委員

事前に断っておく。古臭い考え、それから乱暴な言葉遣いになるかと思うが、最初からご容赦していただきたいと思う。誤解を恐れず話させてもらおうと、渡された資料を何回か読み返した。どうしても納得いかないところは何ヶ所かあった。１点目はレクリエーション化しているのではないか。私はバレーボールしか知らないので他の競技と一緒にできないが、とにかくボールを落とさない、そのためにどうするんだと。それから目の前の１点を取りに行く。これに対する技術、厳しさのようなものが書かれていない。多様性は確かにわかるが、大変失礼だがレクリエーション化しているのではないかという気がしている。そして、資料に違いなどの言葉が書かれているが、何か空回りしているような感じがする。

●佐藤教育総務部長

今の発言について何かあるか。

●菅コーディネーター

多様なニーズということから、多分だが、例えば剣道も大会で上位を目指したいという意思や気持ちを持っている生徒と、そうではなく、体力増進とか好きでやっている人と、同じクラブ内で目的が違うところに対応して活動していくのではないかと考える。先日テレビを見ていたら、クラブ活動のニュースがあったが、そのクラブは一切大会に出ないという方針で子どもたちが集まって、大会に出るか出ないかについては高校まで考えて、大会で成績を収めたいという子は高校で頑張っていくという考え方を選んだ人もいたようだ。そこはスタッフの人数にもよるが、生徒の多様なニーズに応じた活動内容になっていくのではないかと感じる。

●加賀谷教育委員

点数を1点でも取りに行く、それから楽しくやりたいという、先ほど専門性のある先生が不足しているということをリンクさせれば、1人の指導者ではなかなか難しいのではないかと。個人的な感想だが、叱らない教育でやってきた子どもたちは、我慢するとか、人に順番を譲るとか、そういう部分を発見できない気がしている。古臭いと言われれば確かにそうかもしれないが、私はそこからなかなか抜けきれない

考え方なので、今の自由だから何をやってもいいということではないと思うので、そのクラブの生徒をそれなりに統率していくということだとすれば、やはり厳しい言葉なども必要ではないかという気がしている。

●菅コーディネーター

国のガイドラインの大きな一つに、地域クラブになっても学校の教育的なこれまでの指導や、部活動の教育的意義は継承、更に発展していくということがあるので、これまでの学校部活動の延長線として活動していくのが適正と思っているし、先ほど説明した認定制度を設けた際にもそのことは十分競技団体と話し合い、マッチングを進めていきたいと考えている。それから、8月に中学生のアンケート調査をしたとき、どんな指導者を求めているかということに関して、圧倒的に多かったのは競技能力が向上するということが大部分であった。それから、今まで学校生活をともにしている先生に教えていただきたいという割合が35%、もう一つは、やはり礼儀とかマナーだとか、そういうことも大事という割合も35%いたので、子どもたち自身もそういうことを自分で考えて、クラブのあり方というものを選んでいくのではないかと思うし、また、そういう生徒であってほしいと考えている。それから一方で、クラブ化していくと、厳しいとか、専門性が高いので自分は無理なのではないかと考えて入らないという意見もある

ので、様々なニーズに答えられるようにしていければと思っている。

●佐藤教育総務部長

他にご意見ある方いるか。

●二階堂教育委員

指導者としての資格の取得という文言あるが、具体的にどのようなことをすればその資格が得られるのか、その辺もう少し詳しく教えてほしい。

●菅コーディネーター

現在の部活動顧問については、公的な指導資格は求められていないが、地域クラブ等についてはいわゆる公的な日本スポーツ協会等の指導資格が必要になってくる。今現在活動しているバトミントンジュニアスポーツ少年団についても、指導者においては全員公的なスポーツ資格を持っている。

●二階堂教育委員

公的な資格を得なくても指導できるクラブ活動もあるということか。

●菅コーディネーター

それは先ほどのガイドラインの18項目の中にも指導資格という項目が盛り込まれているし、それから地域クラブ認定の際にも指導者がどういう方でどの資格を持っているのかということも申請書の中に明

記してもらっている。

●二階堂教育委員

少しよくわからないが、例えばバスケットボールであれば、どういう資格が必要になるのか。

●高橋教育指導係長

競技ごとによって資格の内容、取り方が異なるので、バスケットボールについて何の資格が必要かということを今お答えできるほど詳しくないが、日本スポーツ協会での資格を推奨している競技が多いようだった。

●二階堂教育委員

例えば、私も以前やっていたミニバスケットボールの指導に関しても、スポーツ少年団として秋田市などいろいろなところに行って、講義などを受けて、資格を得た上で指導するという流れがあるのだが、ただ参加して終了したから資格があるという印象だ。そのため、地区によっては問題があるスポーツ少年団があったりという経験があるので、その辺のところがわからなかったので尋ねた。

●菅コーディネーター

現在のところは日本スポーツ協会または公益財団法人が認定する指導者資格ということで、一応線引きをしている。

●二階堂教育委員

それで何も問題がなければいいのだが。

●菅コーディネーター

併せて、そのためにも、指導者に関しては教育委員会の指導者研修会に参加していただくというような計画である。

●二階堂教育委員

前であれば、教育委員会からの指導か要請もあったと思うが、それ
もあまり重要視しないような指導者も中にはいたような気がしたので
、今回、移行されていけば、より教育委員会からの指導が強いものにな
っている、ということでもいいか。

●菅コーディネーター

保護者のアンケート、それから子どもたちのアンケートでも、指導
者の資質ということが挙げられているので、その点については慎重か
つ丁寧に進めていきたい。それから、教職員へのアンケートで、地域
クラブ化になったら参加したいという先生方と、依頼されたら考えた
いという先生方が40%になっているので、その4割の先生方のご協
力も得ながら進めていければと考えている。

●二階堂教育委員

そうだと思う。大変熱心な先生もいる。それに負担するようなこと
なく移行できればと思う。

●加賀谷教育委員

もう1点伺う。資料ずっと見て、社会体育に移行した場合にハラスメントの部分が少し強調されているようだが、以前にも体罰やハラスメントは当然あったはずだ。それを踏まえてこうだという記述であれば納得した部分もあるが、社会体育に移行する場合にはその点をどう考えているのか。

●菅コーディネーター

地域クラブ認定の要綱と、それからその要件書を作って、そこにハラスメント等の条文を盛り込んでいる。クラブ側でそれを承認してもらって署名してもらって手続きを進めていきたいと考えている。それから、当然クラブ側にも相談窓口の設置は義務付けたいと思うし、それから委員会の方でもオンライン、SNS等を活用して相談窓口を設けて、関係団体および学校と連携してトラブルや相談に対応したいと考えている。

●佐藤教育総務部長

教育長から何かあるか。

●伊藤教育長

今の話の中で、学校の部活動から生涯教育の考え方に移行する、部活間の移行ということがあった。いずれ、これまでの学校主体の部活動だけではなくて、地域と一緒にあって、地域の方々にも子どもたちの成長を見てもらう観点から、この移行が始まっていくのだろうと考

えている。ただ、これまでのように学校の閉鎖的な社会の中で行われていた部活動のイメージを、地域にそのまま移行するのではなく、全く新しい視点で子どもたちの活動を保障していかなければいけない。その転換点をスムーズに行えるかどうか、その地域がそれを理解して行うことができるかが非常に大きなカギになろうかと思う。現状では、横手市の場合は学校の部活動に対して、またはスポーツ少年団の活動に対しては、非常に配慮した支援を、他町村に比べると圧倒的に行っている。スクールバスでの選手送迎をはじめ、大会参加に向けての補助金等々、そういった良いところを残しながら、しかし行政が全て経済的な支援を行う考え方ではなくて、あくまでもスポーツ少年団のような形で、地域の方々が子どもを育てるという観点から、ボランティア精神を十分発揮していただく中で形作れないかという気持ちである。そのための準備に本格的に入るのも、その前の一つの例として、バトミントンのスポーツ少年団からの中学校への移行を実現したところである。これが一つの見本になるのではないかと考えて、バトミントンとはだいぶ話をしながら、菅先生にも骨を折ってもらって、うまく移行したので、他の競技にも広げていきたいと思っている。いずれ、様々な競技ごとの違いがあって、準備も違おうだろうと思っている。紆余曲折があるだろうと思うが、とりわけ学校教育課とスポーツ振興課がこの件に非常に関わる補助金制度を持っているので、この

2 課については今後話し合いの上、1 課にその仕事を集中させたほうがいいのかどうかも含めて検討も必要かと思う。

●佐藤教育総務部長

市長から何かあるか。

●高橋市長

このような短期間での部活地域移行という取りまとめで、いろんな角度から多分問題課題というものを考えながら、欠点を埋めていく作業で、その作業取りまとめにご難儀したことに対してはご苦労さまでしたという労いの言葉を申し上げる。さて、そもそも学校教育での部活動の存在意義、何のために部活をやるのかというところで、それはスポーツ界の発展のためとか、スポーツ団体の担い手、裾野を広げるためとかではないと思う。あくまでも人間形成、人格形成で、スポーツでも文化でも、その子に負荷を与えたり、体験を与えたり、また集中力を養うとか、人と人との調整・調和とか、部活とはあくまでも人間形成のきっかけなのではないかと思う。しかしながら、何か目標があると何をすべきかということは見つけやすくなるので、やはり勝つというのは一番わかりやすい。先ほど私の冒頭の挨拶では楽しみとか好きという話をしたが、今は真逆の話をすることになるが、我々のチームは楽しくやっていくという時に、どうすれば目的度合いを達成したのか掴み取りづらい。みんなが楽しかった、よし目標達成となれば

、もしかしたらすごいハードルが低いかもしれない。勝つとなると、結果が明確に明快に見えるので、今のメンツで勝つためにはそれぞれ何をやればいいのか、チームで何をやればいいのか、そういう目標を逆算して決めて、目標を達成するためには自分たちはどれぐらい努力すればいいのか。やるべきことが明確明快になって、それで過程が足りなかったり自分が至らなかったり、能力がなかったりすれば、なかなか勝つという目標まで至らず、そこで自分の身の丈を覚えたりする。勝てなかったら勝てなかったなりに、勝つなら勝つなりに気づくこと、成長できることがあるかと思う。レクリエーションとは違うということ、どんなチームであっても、優勝という勝利なのか、一回戦突破という勝利なのか、構成メンバーによってハードルは違うだろうが、そのチームなりに勝利を目指してやることになる。中学校3年間という期限が限られている中で、やるべきことがぼやけてしまうとなかなか成長への時間は見出せない。その子を教えた時に技量も体力も心も成長するという結果がこの地域移行の成功だと思う。クラブチームというのは、一番上に実業団とかプロがあって、人材育成もあるが、発掘のためだと思う。しかし、この地域移行は、関わっている人みんなが成長できないと意味がない。この流れの出どころが過疎化であったり少子化であったり、先生方の働き方の軽減ということを考えてもらい、この移行に向かっていかないといけない。あと、家庭の事情

と個人の事情で、勝利至上主義に飛び込めない個人だったり、家庭だったり、置かれているその子一人ひとりの能力、背景によって選べる選択肢というものは、ある程度様々にならざるを得ないと思うが、やれるものからやって、無理して全てという必要はないかと思ってしまう。なので、当初の部活動の指導よりも子どもたちがよく育つという状況になったものから、移行を徐々に進めていくべきなのかと思ったりもする。これは私の個人的な感想である。

●佐藤教育総務部長

この案件については終了する。議題の最後、その他だが、何か全体を通して意見あるか。

●高橋市長

何とか打たれ強い子にしていってほしい。腫れ物に触るように扱わないといけない、優しい子より、ちょっとやそつとではへこたれない、くじけない、そういう子が際立った能力の子よりも必要になってくる。

●佐藤教育総務部長

他に意見が無ければ、議題については終了する。

●田中総務課長

予定していた案件の協議が全て終了したので、以上をもって令和6

年度総合教育会議を終了する。お疲れ様でした。

閉会 午後 5 時 2 9 分